

どこにでもある 家族のカタチ

さまざまな事情で家族と離れて暮らす子どもは県内で約650人。このような子どもを自分の家庭に迎え入れ、共に暮らす町内の里親さんに話を聞きました。



ミカさん(仮名)
両親と暮らす家
に里子さんを迎
え、共に暮らす
養育里親

里親になれるのは夫婦だけ？

「職場の社内誌で里親制度を知りましたが、夫婦でない自分は里親になれないと思っていました」

そう話すミカさんは現在、フルタイムで勤務しながら里子さんと一緒に暮らしています。里親になるきっかけになったのが、おいと共に過ごした3年間。「おいの家から高校までが遠く、私の家から通うことになったんです。それまで自由にしていた自分の時間はなくなっただけで、とても充実していました」と振り返ります。子どもが好きなミカさんは、これが自分のしたかったことだと実感。里親制度について詳しく調べ、県内の里親委託率が低いこと、夫婦でない自分も里親になれることを知

り、里親になることを決意しました。

普通や理想を押し付けず 愛を言葉や行動で伝える

当時3歳の子を迎え入れ、ミカさんが一番驚いたのが入浴。一緒に入ろうと服を脱ぐミカさんに「脱がないで、見て」と里子さんは言いました。施設では職員が服を着たまま入浴のお手伝いをしていたため、里子さんにとってはそれが普通だったのです。「自分にとっての普通や、こんなふうで育てたい、こんな子になってほしいという理想を押し付けず、里子のために里親がいるという意識で過ごしています」というミカさん。数カ月後、里子さんに誘われ、一緒に入浴するようになりました。里子さんとの暮らしでもう一つ意

識していることが、好きな気持ちを言葉や行動で伝えること。自分を愛してくれる人がいるのを感じてもらいたい。ミカさんは毎日「好きだよ」と里子さんに伝えます。その思いはしっかりと伝わっているようで、「不意に後ろから『いつもありがとう』』と言ってきたり、最近では『だいき。いつもありがとう』と手紙を書いてくれるんです」とミカさんは目を下げます。

“普通”の暮らしの中で 人生の糧となる時間を共に

活動的で、人を笑わせるのが好きだという里子さん。変顔をしたり面白いことを言ったりしてミカさんが笑う。そんなミカさんを見て里子さんも笑う。二人の家庭には笑顔があふれています。

「うちを出た後の生活で大変なことがあっても、楽しかった時間があるから頑張れる。人生の糧になるような時間を共に過ごしたいですね」今はまだ数少なく、特別に見られがちな里親家庭。当事者となったミカさんは語ります。

「特別なことは何もしていません。普通に暮らしているだけ。どこにもある家族のカタチでいいと思っています。そんな里親家庭が増えて、地域の目も温かいものになっていくればいいなと思っています」



ミカさんが七五三の時に使ったバッグ。里子さんの「ごっこ遊び」の必須アイテムに